

ISSN 2186 – 3989

英語学習における英語文学作品の有用性
— 学習者の視点から —

安田 優、轟 里香

Using English Literature as Teaching Materials

Masaru Yasuda, Rika Todoroki

北 陸 大 学 紀 要
第48号(2020年3月)抜刷

英語学習における英語文学作品の有用性 —学習者の視点から—

安田 優*、轟 里香***

Using English Literature as Teaching Materials

Masaru Yasuda*, Rika Todoroki***

Received November 5, 2019

Accepted December 20, 2019

Abstract

The idea of using literary works negatively reminds people of the traditional grammar-translation method, which tends to be thought passive and out of place in the age of active learning. The active learning method is usually said to motivate students to learn by their own initiative, making it possible for learners to acquire the basic social, communicative and practical abilities. Here arises a question: does utilizing literary works necessarily have to be connected only to passive learning? Literary materials have a lot of possibilities. Depending on the usage, they could be efficient study materials even in the active learning classroom. Literary works being socio-cultural constructions, students can learn both cultural and social issues in an authentic context. Literary texts also contain many useful expressions and vocabularies seen in everyday life. As in reality, they require learners to read between the lines and make inferences, which is one of the most indispensable skills of communication. Most of all, literature has much room for interpretation. If adequately utilized, literary materials would stimulate students' imagination and bring out many ideas from them. They thereby would spontaneously come to want to discuss their ideas with peers. The atmosphere of the classroom would then be active in the fullest sense. So as to make the most of literature, however, it is desirable that it is better received by students. Learning time at university is limited, and materials that motivate students the most might enhance their learning capacities. This essay is intended as an investigation of how students view literary materials through a questionnaire survey and to suggest the further possibility of using literature in the English classroom.

* 関西外国語大学 Kansai Gaidai University

2007年4月から2017年3月まで北陸大学未来創造学部所属。本稿は北陸大学在職時の研究を基に発展させたものである。

**北陸大学国際コミュニケーション学部 Faculty of International Communication Hokuriku University

***: 責任著者

1. はじめに

英語教育における教材としての文学作品の立ち位置が否定的なものとなってから、かなりの年月が経過している。そのような状況の下で、文学が英語教育に資することが多いと考える教員も一定数存在する。大学英語教育学会（JACET）関西支部文学教育研究会の活動などにも見られるように（安田、2018）、文学作品をうまく活用することで教育効果が高まることが提示され、そして主張され続けているのである。しかし、文学の有用性を訴える必要があるということは、教育現場においてその訴えがまだ浸透していないことを示すに他ならない。一般的な英語教材が扱う読解用文と文学作品の間に有意義な差を認めていない人たちも依然として存在し続けている。文学という言葉が引き起こすかもしれない否定的な響きは、過去の訳読中心授業の弊害と言えるかもしれない。文学≠訳読用の教材という図式が広まっているのである。しかし、文学素材が英語教育に役立つと考える教員も昔ながらの訳読だけが、英語力の上達に役立つと考えているわけではない。また、文学素材だけを扱うべきと言っているわけでもない。もし文学作品が何らかの形で英語教育に貢献できることがあるとすれば、それを活用しない手はないと主張しているだけである。

昨今の英語教育で求められることが多いのは、実用的あるいは実践的英語力の向上であろう。意思疎通する手段としての英語力の向上が求められているわけである。他者との意思疎通においては、会話を成立させるために必要最低限の語彙と文法知識が必要である。また、より流ちょうな英語の発話のためには、実際に教室の内外で英語を話してみる機会を多く持つことも重要である。そのような考えると、学習者が相互に教え学び合い、授業に能動的に関わるアクティブ・ラーニング型授業は、理想的な授業展開の一つであるかもしれない。このような形態の授業が求められる高等学校学習指導要領¹には、外国語学習で育成を目指す力について『知識及び技』と『思考力、判断力、表現力等』を一体的に育成するとともに、その過程を通して、「学びに向かう力、人間性等」に示す資質・能力を育成」とある。また、教材の配慮に関しては「多様な考え方に対する理解を深めさせ、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つこと」とある。このような力を養っていくためにも文学作品は有効であるかもしれない。文学はその作品が生み出された文化的、そして社会的状況を反映しており、長短を問わず文学作品を読み解く過程で、他国の人たちの文化や考え方も必然的にそして無理なく知ることができる。また、作品中のセリフは日常生活における対話と同様に時に行間を読むことを求める。学習者は文化的背景や相手の考え方などに敬意を払いながら、対話をする相手の発話を文字通りにだけ理解するのではなく、その時々文脈の中で、推測力を適宜働かせながら、的確に、かつ自然に理解することを学ぶことができるのではないかと。もしそうだとすれば、思考力、判断力、表現力に加えて、多様性についても触れる機会を与えてくれる文学は、適切に選択し活用するならば、時間が限られている場合が多い大学においては特に、効果的な素材となりうるのかもしれない。さらに、文学はオーセンティックな英語で書かれたものでもあり、学習者のプライドを擽り、学習意欲の向上にもつながるかもしれない。

このような議論の中で学習者である学生自身は、教材としての文学作品をどのように捉えているのかについての議論は抜け落ちていることが多いのではないかと。近年、学生が本を読まなくなったということが嘆かれている。しかし、学生の読書経験の少なさは、必ずしも学生が文学作品を好まないということを意味しない。2006年の五大学を対象とする調査（安田、2013）において、実に平均86.4%の学生が、語学クラスでの文学作品活用を望んでいるという結果が示された。学生は読書習慣がないかもしれないが、文学作品を避けたいわけではないのである。その調査から10年以上が経過している。文学素材軽視の

傾向や、学生の読書不足という状況には緩やかな変化しかないが、文学作品あるいは英語教材としての文学に対する考え方はどうなのか。本稿は、まず私立の二大学における学生の一般的な考え方に関する調査結果を、さらに実際に文学作品を活用して授業を用いた後の学生の反応についても検討し、学生の視点から見た英語の学びにおける文学作品の有用性を考察する試みである。

2. 文学に対する学生の関心

2.1 学生アンケート調査対象と調査項目

本調査は、大学 A における英語系の学部と、大学 B における非英語系学部の学生を対象に実施したものである。Benesse の調べ²によると、2017 年時点の大学 A の入試難易度は 60 前後であり、大学 B の当該学部の入試難易度は 47 前後であった。総回答者数は 236 名（大学 A：143 名、大学 B：93 名）である。アンケート調査項目は次の通り（語調は論文用に変更）である。本アンケートには、物語性を有するという点でも文学と関連性が強く、学生に受容されやすい映画についても、比較対象として項目に加えている。

表 1 アンケート質問項目

質問①：日本語や英語を問わず小説を読むのが好きか。
質問②：映画を見るのが好きか。
質問③：小説を読むのと、映画を見るのとではどちらが好きか。
質問④：これまでに日本語か英語で英語圏の文学作品、英語に翻訳された文学作品を読んだことがあるか。
質問⑤：英語クラスで、英語圏文学や英語に翻訳された文学を教材として使ったことがあるか。
質問⑥：英語授業の中で文学作品を活用する場合、どの技能を向上させられると思うか（複数選択可）。
質問⑦：英語授業の中で文学作品を活用する場合、どの技能に焦点を合わせて授業をすればいいと思うか（複数選択可）。
質問⑧：物語性のある文学作品を「何らかの形で」英語授業の中で使うことについてどのように思うか。
質問⑨：英米圏の文学作品を読むことで、どのようなことを学べると思うか。
質問⑩：新聞・雑誌記事などの英語教材と、文学を用いた英語教材とでは、学べる内容・技能がどのように異なると思うか。
質問⑪：大学生として、（英語授業に限らず）授業・講義の中で海外の文学作品に触れるということについてどのように思うか。

これらの質問のうち、質問①から質問④は学習者の読書習慣や物語性のあるメディアに対する関心などを問うもの、質問⑤から質問⑪は実際の英語授業における文学素材の使用

経験と、その経験を踏まえて、学習者が文学作品をどのように捉えているかを確認するものである。表1の質問①から質問⑦が選択式、質問⑧から質問⑩が記述式の質問である。回答方式は、多様な見解の入手を狙いとして選択式と記述式の両方を採用した。

2.2. 学生アンケート調査結果（全体）

本調査対象となる大学は次の点で対照的である。まず、入学難易度にそれなりの差があり、英語学習熟度においてもかなりの差があることが推察される。また、自らの意志で語学を専門とすることを選択した学生を多く含む学部と、英語を専門とせず語学が苦手な学生が多い学部という点である。

これらの相違を勘案すると、各質問項目に対する回答結果には、目に見える違いが現れるのではないかと予測される。ここでは調査項目のうち、質問①から質問⑤、また質問⑧を取り上げ大学別に検討する。

表2 大学A・大学B：アンケート調査結果（回答者数と全体に占める割合）

	回答数	割合	回答数	割合
	大学A	大学A	大学B	大学B
①小説を読むのが好きである。（表1質問①に対応）	143名	62.2%	93名	40.9%
②映画を見るのが好きである。（表1質問②に対応）	143名	94.4%	93名	92.5%
③小説と映画を比べると小説が好きである。 （表1質問③に対応）	142名	13.4%	93名	6.5%
④小説と映画を比べると映画が好きである。 （表1質問③に対応）	142名	61.3%	93名	75.3%
⑤小説と映画の両方が好きである。 （表1質問③に対応）	142名	24.6%	93名	17.2%
⑥英語圏文学の読書経験がある。 （表1質問④に対応）	143名	65.0%	92名	18.5%
⑦文学教材を用いた学びの経験がある。 （表1質問⑤に対応）	143名	71.3%	91名	62.6%
⑧文学を用いた英語授業を導入して欲しい。 （表1質問⑧に対応）	142名	80.3%	92名	50.0%

2.3. 学生アンケート調査結果（大学A）の分析・検討

大学Aの調査においては英語系学部を対象としており、総回答者数は143名である。表2の①から⑤は、一般的な物語性のあるメディアに関する学生の関心度を示している。大学Aにおいては、文学作品を読むのが好きであるという層は62.2%に達する。学生の読書習慣の欠如という一般に言及される状況³を鑑みると、読書を好む学生が約6割という結果は、比較的高い数値であると言えよう。小説を好む率の高さは、文学を素材とする英語教材が学生の学びの意欲を向上させられることにもつながる可能性があり、この結果は文

学を用いた英語学習教材の方向性を示唆してくれるかもしれない。小説を好む学生が挙げる理由には、単に好きだから、あるいは楽しめるからというものもあるが、それ以外の代表的な回答は次のようなものであった。「他者の考えを、時間をかけて知ることができる」「自分とは違うものや人への見方が得られる」「知らない世界／実際には体験できない世界を想像し、味わうことができる」「自分のペースで読み進められ、自分の世界観が広がり、教養にもなる」「自分で想像して話を読み進めるのが楽しい」「新しい知識や言葉を知ることができる」「文学作品ならではの表現や比喻が魅力的である」「読み終えた後、新しい感情が生まれる」「小説を読むことで色々な話を知り、独自の解釈ができるから」。

学生が挙げたこれらの理由からは、(1)他者の考えを知る、(2)他文化・異文化を知る、(3)表現力を高める、(4)自分自身の考えを持つ、というコミュニケーションの基本的な枠組みを見て取れる。その反面、小説を読むことを好まない層が挙げた理由の大半は「読む時間がない／時間がかかる」「本／文字を読むことが苦手であり、読もうという気になれない」「表現が複雑で面倒である」というものに集約できる。

これらの理由は読書習慣が身につけていないという事情と関係しており、想定範囲内の理由と言える。読書に対する肯定的な反応と否定的な反応の両者とも、学を用いた英語授業運営を検討する際に有用な情報であろう。

他方、映像メディアである映画については、肯定的な回答が 94.4%を占めている。映画鑑賞を好む理由には、登場人物の経験を自分のものにできるであったり、自分以外の人の物の捉え方を知ることができたり、という小説を好む理由と共通する理由を挙げている学生も多い。また、英語／日本語字幕を含めて視覚面や音声面などを通してよりリアルさを感じられるという理由、また短時間で一つの物語を見られるからという、小説を読むことが苦手な理由と対応する理由などが代表的な回答である。わずかではあるが、映画鑑賞に否定的な学生は、単につまらないという理由や、二時間前後という上映時間が長すぎて集中力が持たない、という集中力のなさに起因する理由を挙げている。後者の理由付けをした学生は、必ずしも全員が小説を嫌いというわけではなく、自分のペースで読むことができる読書は好きであるという場合もあった。

小説を読むことが好きな学生の割合と映画を見るのが好きな学生の割合を比較すると、それぞれ 62.2%と 94.4%である。小説と映画の二択で考えてもらった場合、この数値には変化が見られる。小説と映画の両方を好む層を勘案すると、小説を好む割合は 38%、映画を好む割合は 85.9%となる。どちらの割合も減っているが、特に小説を好む学生の割合が大きく減る。また、それぞれを好む理由としては、概ね小説・映画を好む理由と共通しているが、小説だけを好むと回答した学生は、その理由として特に小説が包含する情報の多さや詳細さ、文字から情景を想像する楽しみを挙げている。また、両者を好むと回答した学生は、文字による情報や表情などの視覚情報や音楽などの音声情報など、それぞれのメディアの利点に言及するものが多い。

原書であるか翻訳書であるかを問わず英語圏の文学作品に触れたことがある学生の割合は 71.3%である。また、文学素材を用いた英語授業を履修したことがある学生の割合は 71.3%である。学を用いた英語教材に対する風当たりの強さを考慮すると、比較的高い数値であると言えるかもしれない。どのような形で授業に文学が取り入れられていたかについては、使ったことがあると答えた回答者数 106 名のうち、(1)オーセンティックな作品活用が 43.4%、リライトされた素材活用が 7.5%、作品一部の抜粋活用が 49%となっている。好むと好まざるとに関わらず、70%前後の学生が、何らかの形で文学作品を活用した英語授業を経験している。そして、その経験を踏まえた上で、英語授業における文学作品活用について回答しているのである。積極的に文学作品を取り入れて欲しいという学生の割合は、実に 80.3%を占める。どちらでも構わないという学生が 17.6%であることを考慮

すると、97.9%の学生が文学を用いた英語授業を肯定的に捉えており、文学を用いた授業に否定的な学生の割合はわずか2%に過ぎない。学生の視点からは、文学作品を活用した授業はとても好意的に受け入れられているのである。

2.4. 学生アンケート調査結果（大学B）の分析・検討

大学Bの調査は非英語系学部の学生を対象としており、総回答者数は93名である。大学Bにおける回答学生の英語力は低めであると推察される。大学Aと比べると、次の三点で違いが顕著となっている。一般的な読書を好む層が40.9%と少ない点、英語圏文学の読書経験がある学生の割合が18.5%と少ない点、そして文学を用いた英語授業に対して肯定的な反応を示す学生の割合が50.0%と少ない点である。

まず小説を読むことを好む学生が挙げている理由については、単に面白いので好きであるという理由もある。しかしそれ以外では、表現は異なるものの、かなりの点で大学Aでの回答と共通している。代表的な回答は「人の新しい概念を自分の知識に取り入れられる／人が考えていることが気になる」「自分の想像力で話の世界を広げられる／その世界に入った気分になる」「自分の想像力の及ばないような世界にいざなってくれる」「その地域毎の文化や習慣を読み取れる」「国語力・文章力が向上する／難しい言葉を知ることができる／勉強になる」というものである。

大学Aの回答と同様、(1)他者の考えを知る、(2)他文化・異文化を知る、(3)表現力を高める、といった点に集約できる回答がほとんどであった。他方、小説を読むことを好まない層が挙げている理由もまた、大学Aとの共通点が多く、「読書が嫌いである／文字・文章を読むことが苦手である／本を読む習慣がない」「難しい言葉がたくさん使われているため、うまく読むことができない」「集中力が持たない／疲れる／面倒である」というものであった。特筆すべきは、このような内容に集約される回答が大半ということである。文字や文章理解に難があり、集中力に欠けるというような学生像は、一部の大学を除いて、多くの大学で散見される学生像と一致するであろう。しかし、その一方で映画鑑賞は好きであるという回答は92.5%であり、大学Aとほぼ同等である。単に好きであったり、興味があったりという回答以外の代表的回答は、「わかりやすい／見ていて楽しい／物語を面白く表現してくれる」「見ているだけでいいので楽である」「登場人物の感情を読み取ることができる」「色々なことを想像できる」となっており、小説を読まない理由の裏返しでもある。

小説を好む理由と重なるものも見られるが、文字を基盤とする小説からは読み解くことができないような登場人物の考えを、映像からは読み取ることができるが故に映画に関心を持つ学生も存在する。

大学Bにおいては小説と映画を比較した場合に、映画を好む層が若干多い。しかし小説と映画の両方が好きであるという学生群を含めると、小説を好む学生の割合は23.7%であるのに対し、映画を好む学生の割合は92.5%である。大学Aよりも後者の割合が高い分、前者の割合が低くはなっているが、大枠としては同様の傾向にある。文字メディアは苦手であるとしても、映像メディアとしての物語自体を嫌うわけではないのである。

英語圏文学については、81.5%の学生が接した経験なしと回答している。非英語系学部の学生であることに加えて、文章を読み慣れていない学生が多いということと対応する結果であろう。しかし、文学を取り入れた英語授業については、62.6%の学生が経験ありと答えている。経験ありと回答した学生のうち、(1)オーセンティックな作品の活用は38.7%、(2)リライトされた素材活用は25.8%、(3)作品抜粋の活用は32.3%である。大学Aの回答

結果と比べ、リライト素材活用の割合が高いことが目立つが、学習者の進捗状況に合わせ、平易な英語で書き換えられた教材が使用されたのではないか。文学を読むことになっていない学生群であるにも関わらず、半数を超える学生が文学を用いた英語授業を経験している。そして、同一群の学生の46%が英語授業における文学素材活用を肯定するという結果が示されている。どちらでも構わないという層を加味すると、93.5%の学生が英語教育教材としての文学を受け入れているということである。これは大学Aの97.9%と比べても遜色ない数値である。文学を読むのは好きではないが、英語授業における文学素材の使用は受け入れる。ここに文学素材を使った英語教育の可能性を見て取ることができるだろう。

2.5 文学に対する学生の関心—過去から現在へ

調査対象である大学Aと大学Bでは、学生に対する文学作品の浸透度は明らかに異なる。それにも関わらず、両大学の調査結果は文学作品を英語授業の素材とする可能性を排除していないことを示す。このことは、学習者が個々の嗜好を超えて、学習教材としての文学作品に魅力を感じているということではないか。このような学習者の意向をくみ取することは、学ぶ意欲を高める運営や効果的な教材開発にもつながる。

英語授業において文学を使う場合、学習者がどのような技能を向上させられると考えているのか、またどの技能に焦点を合わせることを望んでいるのかを知ることも有用であろう。文学作品が文字媒体であることから、文学素材を活用した英語授業で向上させられる技能を、学生がリーディング力と関連付けて考えやすいことは容易に予測できる。実際、調査対象大学のどちらにおいても、文学を活用することでリーディング力を伸ばすことができると答えた学生割合が一番高い。しかし、その他の点で表3に見られるように、二つの大学には回答傾向に差が見られる。

表3は、アンケート結果のうち、文学作品を活用することで向上すると回答された技能、および文学作品を活用する際焦点を合わせてほしいと回答された技能を示したものである。大学Aでは、文学素材を活用することで向上すると学習者が考える技能の次点は、ライティング力であり、残りの項目はほぼ同じ割合である。どの技能を選択しているかに関らず、リーディング作業を通じて語彙力・文法力・表現力を養い、それに伴ってその他の技能も向上すると帰結する学生が多い。読解を通じてのインプット作業により、アウトプット力が向上すると捉えているのである。各技能の向上が相互に関連していることに言及する学生も散見された。

また、文学素材を使うことで向上するであろうと学生が考える技能については、31.1%の学生がリーディング力を選んでいる。それに対し、文学素材を活用した授業において焦点を合わせて欲しいと学生が考える技能はリーディング力であり、その割合は61.3%である。焦点を合わせて欲しい技能としてリーディング力を選ぶ学生の割合は、向上すると考える技能としてリーディング力を選ぶ学生の割合と比べて約30%も増加しているのである。同様に、文学を用いた授業によって向上すると学生が考える技能のうち、ディスカッション力を選ぶ学生の割合は13.1%であるのに対し、焦点を合わせて欲しい技能としてディスカッション力を選ぶ学生の割合は16.2%である。文学を活用することで向上すると学生が考える技能としてディスカッション力を選ぶ学生の割合と比べ、ディスカッション力に焦点を合わせて欲しいと考える学生の割合は約3%ではあるが増えている。その他の技能に関しては、向上すると学生が考える技能と焦点を合わせて欲しい技能を比較すると、後者は割合が低くなっている。一つには学生がどの技能を上達させたいと望んでいるかが反映されているかもしれないが、リーディング素材についての学生の要望も反映されているので

はないか。文学素材を活用する英語学習教材の回避傾向と不足傾向に伴い、学習者が文学を用いた英語授業を受講する可能性も低くなっているはずである。語学に関心があり、英語力も比較的高いと推察される学習者層は、物語性のある文学作品を特にリーディング力をさらに伸ばすための英語教材として相応しいとみなしているのである。ひいては現行の非文学素材を基にした英語教材だけでは物足りないと考えているのかもしれない。また、ディスカッション力についても、学習者が自身の見解を持って他学生と話し合うことで理解が深まることを指摘している回答も多い。このことは、文学素材を用いた英語授業が必ずしも受動的な授業というわけではなく、能動的な発信力向上と結びつけられると学習者自身でさえ認識していることを示唆する。文学教材が英語学習に適していることは、JACET関西支部文学教育研究会の活動をはじめとする多くの研究の中で言及され明確にされてきたが、それはまた英語学習者自身も求めている素材でもあるということである。

大学 B では、文学素材を使うことで学習者が向上すると考える技能と、文学素材を用いる場合に焦点を合わせて欲しい技能との間に差は少ない。大学 A の傾向と比べると、リスニング力とスピーキング力という音声による受発信力を選択している割合が増えていることが際立つ。この結果には、大学 B の学習者は文章を読むことが苦手な学生が多いことも影響していると思われるが、記述回答から判断すると、学習者自身が向上させる必要性を感じている技能を選択しているということでもある。しかも、文学素材を用いることで向上させたいと考えているのである。この結果もまた文学素材が活用方法次第で、低学力層にも適した教材となりうることを示す。

表 3 アンケート調査結果：文学作品の活用と英語の技能

(総回答数は大学 A：122、大学 B：116)

	大学 A 向上させられると学生 が考える技能	大学 B 向上させられると学生 が考える技能	大学 A 焦点を合わせて欲しい と学生が考える技能	大学 B 焦点を合わせて欲しい と学生が考える技能
①Listening	14.8%	21.6%	8.7%	23.4%
②Speaking	13.1%	24.1%	4.6%	18.7%
③Reading	31.1%	38.8%	61.3%	41.1%
④Writing	27.9%	13.8%	9.2%	11.2%
⑤Discussion	13.1%	1.7%	16.2%	5.6%

2.6. 英語学習教材としての文学作品が持つ意味

学生が文学作品を好まないという一般に流布している誤解は、今回の調査結果にも示されているように、小説を読むことが好きな層が平均すると 50%前後であることに由来しているのかもしれない。しかし、好き嫌いの比率は半々である。加えて 94%を超える学生が文学素材を英語授業の教材として用いることを厭わないのである。このことは学生が文学素材の持つ価値を認識していることと関連する。物語性を有する文学作品についての学生の認識については、調査対象の大学間で共通しており、「四技能・文法・語彙・表現・日常会話を実践的に楽しく学ぶことができる」「文化・社会・歴史に基づく考え方・感覚・習慣の違いを知ることができる」「比喩表現やジョークなどの表現やオーセンティックな英語

を学ぶことができる」というものに集約できる。

新聞などの他素材と比べて、感情表現やリアルさ、言外の意味を読み解く面白さなどを取り上げ、文化背景も含めて、日常的に使う英語をより実践的に学ぶことができるという回答が多く見られた。また、文学に対する個人的な意向を超えて、ほぼ全ての学生が大学生としての教養という点で、学生時代に海外文学に触れる利点に言及していることは特筆に値する。

3. 文学教材を使用した授業実践と学生の反応

3.1. Earnest Hemingway の “Cat in the Rain” を用いた実践

文学という言葉から数百頁にわたる難解な長編小説を想起する場合も多いと思われるが、授業の中で活用する場合には、あくまでもその科目の目的に適う作品を選ぶ必要がある。授業展開も学生数や学生レベルに応じて適宜修正を加える必要もあるだろう。ここでは、大学 A において、授業の導入として実施した Earnest Hemingway の “Cat in the Rain” を用いた授業の流れとその反応について検討する。対象とする学生群とクラスは前述のアンケート対象学生とは異なっており、文学関連講義科目を履修する学生 120 名前後を対象としている。実際の読解作業を経た学生がどのような反応を持つのかを確認することが目的である。

“Cat in the Rain” という作品は、表面的に見れば、アメリカ人女性がホテルの 2 階の窓から見かけた子猫を探しに行くが、その猫がいなくなっていたという状況が提示され、それを契機とするアメリカ人の夫との会話のやり取りを挟み、支配人に指示を受けたメイドが大きな三毛猫をアメリカ人妻のために連れてくるというだけの物語である。この作品を選択した理由の一つとして、この作品が 1000 語をわずかに超える程度の語数であることと、比較的平易な英語で表現されていることが挙げられる。セリフがある登場人物もイタリアのホテルに滞在するアメリカ人夫婦と、ホテルの支配人とメイドの 4 人しかいない。しかし、もう一つの重要な理由は、この作品は文章の表層的な理解だけでは内容把握がしづらく、学生のより積極的で能動的な物語への関与と理解を促す作品でもあるということである。学生に人間の機微に目を向けさせ、多様な考えを引き出しやすい素材であるという点でも、学習教材として授業の目的に最適であると考えた。

3.2. 授業展開

この授業回においては、長編小説を扱う前に、物語を構成する各文の詳細な点にも学生の目を向けさせ、それなりの裏付けのある独自の考えを学生に導き出してもらい、かつその過程を楽しんでもらうことが目的であった。教員はあくまでもファシリテーターとしての役割を担うよう意識した。教室外で一通りこの短編を読んでいることを前提に授業を進めた。

授業展開としては、まず学生に問いを投げかけながら大まかな文意と物語の流れの確認作業を行った。それと並行して、物語の舞台設定、天候、そして風景描写などがどのような役割を担っているか、表現から喚起されるイメージをどのような形容詞で表しうるか、また異なる登場人物が発話する同義のセリフの持つ意味合いなどについても考えてもらっ

た。さらに、確認作業が一通り終わった後に、一層の多様な理解を促すために、ジェンダーに関する知識や社会・文化的背景などについて補足説明を行い、新たな情報を手がかりに、登場人物やセリフなどに関するさらなる考察を学生たちに求めた。

このような流れの中で、タイトルに冠詞がないことの意味を問いかけることで、まずアメリカ人の妻が目にする猫と物語最後にメイドが連れてくる猫が同一であるという可能性について、学生がしっかりした裏付けを有する考えを持つように導くべく努めた。また、アメリカ人の妻と物語中の男性の間の対比に目を向けさせ、最後に作品中の“a man in a rubber cape”という表現が意味するところについて、学生たちにどのように考えるかを問いかけた。作品中の子猫が妊娠願望や自己投影の象徴であるという解釈(今村、1990)や、雨に濡れることが妊娠することと象徴的な関係を持つが故に“rubber”という避妊具を示す俗語としても使われるこの語は、子供を望まない男性というイメージを喚起するのだという解釈など、この作品には既存の多くの解釈が存在する(栗原、2007)。これらの問いかけの目的は、解釈が正しいかどうかよりも、学生が自分自身の考えを証拠立てながら示せるようにすることである。このような質問に対して、多くの学生は謎解きでもするかのよう

3.3. 学生の反応

これらの熟考作業を経た後、学生たちに次の二点の質問に回答してもらった。一点は、学生が物語を読み解いていく作業についてどのように考えたかということ、もう一点は英語の授業で文学作品を使用することをどのように考えるかということである。

まず表4は解釈作業についての学生の代表的な反応である。行間を読むという作業を難しいと感じる学生もいるが、多くの学生は肯定的な反応を示している。本表に挙げた回答は、英語教育における文学素材の肯定的可能性を示唆するものでもある。

回答①では、日本語で書かれた小説を理解する時には意識せずに行っていた行間を読む作業を、これまでは英語ではできていなかったのだという学生の新たな気づきが見て取れる。行間をそれほど読む必要のない新聞記事などの比較的客観的な文章を読むだけではわからなかったことを、小説というオーセンティックな素材を用いることで、学生自らが認識でき、新たな知見を得られたわけである。

回答②と③では、学生が行間を意識しながら物語を読み解く作業を、探偵になったかのように感じるなど、面白く、胸を躍らせるような経験と認識していることを示している。回答④にも当てはまるが、学生は小説の解釈を受動的な行為ではなく、能動的な行為であると考えているわけである。しかも、回答⑥に見られるように、そのような作業を教育的だと感じている学生もいるのである。どのような作品を素材として選択し活用するかということも影響するかもしれないが、たとえ昨今の学生があまり本を読まないという状況があったとしても、授業展開と授業運営次第では、学生が積極的に活動に取り組む意欲を高められる可能性が高いことを示唆しているのではないかと。

さらに回答④と⑤、そして⑦では、訳読などの受動的なイメージと関連付けられやすい文学作品を素材として扱うことで、読解を通じて得られた考えを他者の考えと比較してみたいという気持ちが示されている。つまり、文学作品自体が学生の中に議論したいという感情を喚起する力を持っているということである。他者の考えを尊重したうえで意思疎通の能力をごく自然に養っていくためにも、文学素材は適していると言えるのではないかと。

表4 作品の解釈作業についての回答⁴

①	日本語の小説を読むときは、その書かれた文の意味をそのまま受け取らず、裏の意味や違った解釈がないか考えながら読むが、英語になるだけでその文のままの意味だけを理解してしまう自分がいた。表現されていない部分を読み取っていくことで、より深い英語の持つニュアンスの違いなどを理解できると思った。
②	なんだか探偵にでもなった気分でした。普段読書をするときは、何も考えずに、その言葉をそのまま受けとっていましたが、このように深く考えていく作業はとてもわくわくしました。
③	ミステリー小説を読んでいる気分でした。読みながら情景が浮かんできたけれど、そこから作者からのヒントを汲み取って新たにイメージを形成しないとイケないと思いました。
④	文章を自分なりに解釈して、自分だけの「答え」を持てるのが楽しいと感じた。答えは一つではないし、むしろその答えが正か誤かなんていうのは問題ではなく、自分が「こうだ」と思ったことに対して、根拠がしっかりしていればそれも一つの解だと思った。また他人とも意見交流をして、他人の考え方に触れるのも小説の面白いところだと思った。
⑤	表現されていない部分を読者が自身の想像力で補い、読み取ることで様々な解釈・自由な解釈ができておもしろいと感じた。読んだ後に周囲の人と話し合いたくなると感じた。
⑥	私は「考える」ことが好きなので、非常に興味深い作品だと思いました。文章中に直接目に見える形で書かれたことは、確かに人の目には留まりやすいですが、それが人間の「考える」意味を奪ってしまうと思います。そういう観点で教育的部分を感じました。
⑦	先生の話や友人の意見を聞きながら、自分が読み取りきれなかった部分を見つけていくのは興味深かった。

また実際に“Cat in the Rain”の読解作業を終えた学生に、文学作品の英語授業での活用をどのように考えるかという問いに対しては、本稿の2.2のアンケート結果と同様、肯定的な反応を示しているものが大半であった。表5は回答のいくつかを取り上げたものである。

表5 文学作品を英語授業で活用することについての反応

①	語学の授業＝意思疎通の授業と考えると、相手と意思疎通するためには「相手が本当に伝えたいこと」を推察する力が必要だと思う。この「推察する力」は文学作品を用いるとよく伸びると思う。なぜなら文学作品では紙に記載されている文だけを頼りに、人物の心情などを理解しなければならないからである。よって、意思疎通能力を向上させられると思う。
②	日本語だけに捉われない言葉の広範囲な想像ができたり、もっと違う視点から文を捉えたりできる。
③	単語の一つの意味だけでなく、シチュエーションにあった意味を数多く学べ、自分で選択する力を養える。また細かく文法を確認でき、精読する力がつく。
④	思考力の発達、今は考えるより、決められたことを行う「作業」が多いので、思考力が低下するけど、文学作品に触れ勉強することで思考力も発達する。
⑤	社会観、価値観などを学ぶことができる。また生活をしていく上での苦難や分岐点などに遭遇したときなどに、どのような行動がどのような結果を生み出すのか知ることができる。
⑥	ひとそれぞれ受け取り方が違うので、他者理解や異文化理解にもつながる。
⑦	文法などの勉強だけでなく、ライフスタイルや社会の出来事、人の考え方なども同時に学べると思います。そこから文学や歴史にも興味を持ち始め学びが深まります。

これらの回答内容においてもやはり、意思疎通能力、推察力、判断力、そして思考力の向上、他（異）文化の人々の価値観の理解をはじめとする、文部科学省の学習指導要領でも言及されているようなキーワードが散見される。つまり、英語教育を通して、昨今の学生が修得することを求められている能力を、文学という素材を通じて学びを進めることで得られるかもしれないということを、他でもない学生自身が主体的に意識しているのだとも言えるのではないか。

4. まとめ

本研究における調査を通じて、一般的なイメージとは異なり、大学における英語学習者が英語授業における文学の活用を望むだけでなく、有用だと認識していることが改めて確認された。本稿でのアンケート調査は入学難易度が異なる二大学での、そして専攻分野も異なる学生に対して実施したものであった。学習者の英語力を問わず、文学を用いた学習素材が受容される傾向が示され、そのような教材が学習者の視点からも望ましいものであると示されたわけである。

また、実際に文学作品を用いた授業を体験した学生の反応も単に肯定的であるということだけではない。学生自身が文学作品から学ぶことができると考える項目が、昨今の英語教育が目指す方向性とも一致しているのである。そうだとすれば、学習素材としての文学作品は、多くの学ぶべき項目を有機的に網羅することができる適切かつ有効な素材であると言えるだろう。言うまでもなく、文学だけが学習素材であるべきということではない。有用な学習素材が多々ある中で、もし授業計画に、その目的に合う相応しい状況があれば文学素材を活用しない手はないということである。文学は解釈を伴うが故に教材として教員が手を出しづらいと考えられることもあるが、あくまでも英語学習素材としての文学作品と考えれば、文学研究を目的とするわけではないので、教員が必ずしも独自の解釈を導き出す必要もない。学生の興味を喚起し、教育目標と合致する内容の作品を見つけ出すことができれば、あとはその作品に関する既存の解釈などを検討し活用すればいいのである。またヘミングウェイの短編を起点に文法を学ぶ近年の書籍（倉林・河田、2019）をはじめとする、文学教材を文法修得に活用する類の一般書籍などを活用することもできるかもしれない。文学以外の素材を活用する場合と同様、教員は教育目的を達成するうえで最良の方策を見出し、学生が彼ら自身の視野や思考を広げまとめていく助力となればそれでいいのではないか。そうだとすれば、授業に文学作品を導入することは敷居が高くはないはずである。

本稿では、英語学習における文学作品の有用性を検討してきた。今後の課題としては、本研究をさらに発展させていくと同時に、この調査結果を最大限に生かし、文学が専門ではない教員が構えることなく手に取ることができる文学を用いた学習素材の開発へとつなげていきたいと考える。

注

- 1 文部科学省 高等学校指導要領 https://www.mext.go.jp/sports/content/1384661_6_1_2.Pdf, (参照 2019-10-28)
- 2 入試難易度については Benesse マナビジョン提供の資料を参考にしている。これらの数値はあくまでも大学間の比較のための便宜上の目安として提示したに過ぎない。
- 3 全国の16歳以上の男女を対象にした平成30年度文化庁調査「国語に関する世論調査」によると、有効回答数1960名のうち47.3%は1か月に一冊も本を読まないと回答し、67.3%は以前と比べて読書量が減っていると回答している。読書すべきかどうかという問いに対しては、「そう思う」と「ややそう思う」という回答が60.4%となっており、平成25年度の調査と比べて6%減少している。 http://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/_icsFiles/afieldfile/2019/10/24/a1422163_02_1.pdf, (参照 2019-10-30)
- 4 表4と表5の学生の自由記述に関しては、学生の生の声を提示するために、漢字表現上の誤りや明らかな書き間違いを除いては変更を加えていない。

参考文献

- 今村楯夫. (1990). 『ヘミングウェイと猫と女たち』 新潮社.
- 倉林秀男、河田英介. (2019). 『ヘミングウェイで学ぶ英文法』 アスク出版
- 栗原裕. (2007). 「“Cat in the Rain”—何が曖昧か」. 『大妻女子大学紀要』 39、 228-217.
- 大学英語教育学会 (監修)、塩澤正、吉川寛、石川有香. (編) (2010). 『英語教育学体系第3巻：英語教育と文化 異文化間コミュニケーション能力の養成』 大修館書店
- 高橋和子. (2015). 『日本の英語教育における文学教材の可能性』 ひつじ書房.
- 溝口慎一. (2014). 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』 東信堂
- 安田優. (2013). 「文学・映像作品を用いた英語教育の可能性について」. 『北陸大学紀要』 第37号、 183-206.
- 安田優. (2018). 「文学作品を活用した英語教育への提言」. 『JACET 関西紀要』 第20号、 1-10.
- 吉村俊子、安田優、石本哲子、齋藤安以子、坂本輝世、寺西雅之、幸重美津子. (編) (2013). 『文学教材実践ハンドブック：英語教育を活性化する』 英宝社.
- 渡辺利雄. (2001). 『英語を学ぶ大学生と教える教師に—これでいいのか？英語教育と文学研究』 研究社.